



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

開校25周年

見沼のほとり

第 8 号

令和2年11月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

25回目の開校記念日「受け継がれる気風」

校長 富田 敦

11月18日は土呂中学校の開校記念日です。平成8年に開校した土呂中学校は11月18日に落成記念式典を挙行了しました。以来、この日を開校記念日と定めています。

先日、土呂中学校の最初の入学生で、現在さいたま市教育委員会にお勤めになっている清野 耕平先生と小林 孝太郎先生に開校当時のお話を伺う機会がありました。

清野 耕平 先生「友だちに恵まれ、とても楽しい3年間でした。開校当時のことというと、やはり『土呂湖』を思い出します。大雨や台風の後などは校庭が冠水し、カヌーができるほどの湖になりました。こうなると体育や部活動では校庭が使えず、芝川の土手や学校周辺を走ったものでした。1学期間は私服で登校し、制服は2学期から着用しました。制服を決めるにあたって、1年生がモデルとなって選考会を開きました。3種類の候補の中から保護者が投票で決めることになりました。背が高かった私はモデルに選ばれ、私が着た制服が土呂中学校の制服に選定されたこともよい思い出になっています。」



土呂中生時代の2人

小林 孝太郎 先生「開校の時には何もかも自分たちで作りました。校章は、美術の時間に一人ひとりが考案したものの中から選ばれました。校則もありませんでした。初代の中村 努校長先生が『決まりはなるべく少なく』とおっしゃり、最低限の決まりを生徒と先生で確認しながら決めていきました。このようなところから「主体的に生きる」ということが自分の中に形作られていったように思います。私の修士論文のテーマを『人間形成における主体性の探究』としたのもこの経験が原点となっています。」

お二人とも土呂中生の時は陸上部でした。練習の時には芝川の土手を走ったといいます。長距離走では、正門を出て見沼橋を渡って南に向かい、神明下橋を通過して学校に戻ってくるというコースだったそうです。

そして口をそろえて「学校が新しかったから何でも自分たちで作っていく、学校を創っていくという気風がありました。創立当時は、20年たったら別の施設になってしまうと聞き、大人になったら母校がなくなっちゃうんだと残念な気持ちであったこともありました。しかし今も開校当時と変わりなく、いい学校であると聞き、とてもうれしいです。」と話してくださいました。在校生に対しては「開校当時の『自分たちで創っていく』という思いを受け継ぎ、今の自分たちらしい土呂中学校を作してほしい。これからものびのびと活躍してほしい」という励ましの言葉をいただきました。

「自分たちで創っていく」という気風は今も受け継がれています。先日、生徒会吉田 啓明会長と仙石 みなみ副会長が職員会議に出席し「年間を通した水筒の持ち込みについて」生徒の意見を述べました。要望だけでなく、持ち込みによるメリットとデメリットの両方について話し、その立派な態度に先生方から拍手が起こったほどでした。吉田会長は生徒会朝礼で以下のように全校生徒に話しました。

「今回、生徒総会や意見箱から寄せられた意見の中で特に多かった『1年間の水筒の持ち込み』について、先生方に提案させていただきました。その結果、先生方に同意していただけましたので、1年間水筒を持ち込めるようになりました。土呂中のこれまでの規則が変わるので当然リスクが生まれます。例えば、中身が不当なものであったり、時と場合をわきまえた使用ができなかったり、持ち帰り忘れによる衛生面の危険があったり、と挙げればきりがありません。水筒の持ち込みは、マスクをつける機会が増え、脱水状態に気づかなくなることの防止といった観点もあります。土呂中の水道水も安全で水分補給に困ることもありません。水筒を持つてくる人は、目的を理解したうえで、ルールを守り、自分でしっかりと管理しましょう。我々生徒会も放送や会報でこの取組の詳細を伝えていきたいと考えています。今、皆さんが、そしてこれから入学してくる未来の土呂中生にも、より快適な学校生活を送ってもらえるようご協力よろしくお願ひします。」